

また、活動に参加する児童生徒の保護者(20人)にアセスメントシートを配布、実施し、児童生徒の生活、運動、行動について、評価を行った。また、これらの記録を基に運動発達チェックリスト(松原2012)で動きの評価を実施すると同時に、アセスメントシートの評価の有効性について分析を試みた。

【結果と考察】本研究では、保護者が最も普通の運動の中で児童生徒が苦手な動きと回答したものは「まりつきができない」(9人)や「ボールを狙ったところに投げられない」(8人)「捕球できない」(9人)といった、操作運動に関連する動きであった。他にも、「鬼ごっこですぐに捕まえられない」(9人)といった変換に関連する動きには困難さがあることが分かった。また「走っていて急に止まれない」「よいドンの合図でスタートを切れない」といった項目の得点は低く、活動内で実施する内容と関係していることが見られた。これらの結果を基にさらなるプログラムの充実を図っている。

発達障害のある児童の余暇充実に向けた体育・スポーツの取り組み(その2)

○大和泰基、内田匡輔、吉岡尚美、重藤誠市郎
東海大学体育学部

【目的】エコーキッズ体操クラブは1996年神奈川県秦野市に在住の小学生までの自閉症がある子どもとその保護者を対象とした体操サークルとして始まり2014年に19年目を迎えた。本研究ではこの活動を保護者の視点から評価し、これまで果たして来た、機能や期待をされ課題があるのか明らかにすることを目的とした。

【方法】発達障害児を対象とする「エコーキッズ体操クラブ」(以下エコー)に参加する保護者15名を対象に質問紙調査を2014年7~9月の間に実施した。Matuishi et al.に邦訳された保護者評定:SDQ(Strength Difficulties Questionnaire 2008)を参考に作成した25項目について、保護者の視点から児童の成長を振り返り「変化」があったものに回答を求めた。SDQは、「子どもの強さと困難さアンケート」と邦訳されており、精神的な変化を明らかにする指標として有効である。本調査では、これらの「変化」にエコーがどの程度影響したと考えているかも併せて回答を求めた。

【結果と考察】SDQの中で、「多動」に関する項目では「落ち着き、長い間じっとしていられるようになった。」(6名)「ものごとを最後までやりとげ、集中力がついた。」(6名)、「向社会性」の項目では「他人の気持ちをよく気づかうようになった。」(6名)が、児童の変化とエコーの関連性が「大きいと思う」「少し影響したと思う」項目として挙げられた。これらはエコーがもたらす特徴と考えられた。また保護者は、エコーでの活動による「変化」について、活動期間との関連性を評価しており、エコーに長期間参加している保護者ほど子どもの「変化」に与える影響の大きさを回答する傾向にあった。本調査の結果、保護者は、児童の変化とエコーの関連性があると回答し、この活動に参加している理由として、「エコーではこれら(上記の項目に見られる内容)が付与されるはずである」という期待が見られた。また、保護者の回答がない項目は、今後のエコーの活動内容を見直す課題と考えられた。

ポスター発表

発達障害児における運動意欲に関する質問紙項目についての研究

○齋藤宣子¹、澤江幸則²、齊藤まゆみ²

1) 筑波大学大学院

2) 筑波大学

【目的】発達障害児の障害特性のうち、特に社会性やコミュニケーションの困難さに着目し、その困難さが発達障害児における運動嫌いの起因となっているのではないかと考えた。それを前提に、我々は発達障害児の運動意欲を構成する要素を明らかにしたのちに、運動意欲を高めるための支援を考えることを目標に研究を進めてきた。本研究では上記の目標を達成するための一環として、発達障害児への運動意欲調査における適切な質問項目について検討することを目的とした。

【方法】アダプテッド体育・スポーツ学を専攻している学生13名を対象に予備的調査として実施した。運動意欲に関する調査項目として、猪俣ら(1987)や齋藤ら(2014)などを参考に、自己有能感・身体活動欲求・精神安定欲求・達成欲求・自己顕示欲求・報酬欲求・親和欲求の7つのカテゴリーに分類できる36項目を設定した。この項目を尋ねる際にまず、運動に対する意識の違いを明確にするため、運動の好き・嫌いを尋ねた。さらに好き・嫌いが競技歴に影響しているかを調べるため、小学校から大学までの競技歴を尋ねることとした。加えて、質問項目に関して発達障害児に回答を求めらうえでの問題点を指摘してもらったこととした。

【結果】自己有能感(2.60±0.17)、身体活動欲求(2.91±0.39)、精神安定欲求(3.15±0.68)達成欲求(2.92±0.42)、自己顕示欲求(1.95±0.45)、報酬欲求(1.74±0.36)、親和欲求(3.06±0.31)のカテゴリー間に差が見られ、ばらつきのある項目とそうでない項目があった。これらの特徴について検討した。質問項目の問題点としては、意味が重複する表現、曖昧な対象の表現が発達障害児に回答を求めるとき、質問の理解不足や混乱を招く恐れがあると指摘を受けた。したがって、質問項目の改善の要点として、意味が重複する質問項目の統一、対象や状況の明確化が挙げられた。それらの検討をもとに改善したアンケート項目で発達障害児に対して試行的に実施した。

発達障害児の保護者が持つ「困り感」 —子どもの運動能力とスポーツ参加を中心に—

○吉岡尚美、内田匡輔、重藤誠市郎、大和泰基
東海大学体育学部

【目的】近年、発達障害児の特徴に合わせた効果的な運動指導法が示唆され、多くの指導現場で実践が可能になっている一方で、保護者からは「発達障害児は運動する機会が少ない」という声依然在として聞かれる。そこで本研究では、発達障害児の保護者が子どもの運動能力やスポーツ参加について気になることや困っていることを明らかにすることを目的とした。

【方法】発達障害児を対象とする体操教室に参加する子どもの保護者15名を対象に質問紙調査を実施した。運動能力に関する34項目について気になるか否かを尋ねるとともに、幼児期から現在を振り返って、子どもの運動やスポーツ参加において困ったことや悩んだことを自由記述で尋ねた。

【結果と考察】運動能力に関する項目では、「鉄棒の逆上がりができない(苦手)」(15名)、「持久力がない」(13名)、「ボールがうまくキャッチできない(ごちない)」(12名)、「筋力が弱い」(10名)、「マット運動の後転ができない(苦手)」(10名)、「気がなる」項目として挙げられた。また、自由記述では、地域のスポーツクラブに通えないことが保護者の悩みとして示された。その中でも、水泳を習わせたいが、入会することや継続することが